

近代日本の教育場における「メロス伝説」の
ネットワーク形成過程とその読書材としての価値

R13-4002 佐野 幹

本研究では、太宰治の「走れメロス」と同じ話型を持つ類話を「メロス伝説」と名付け、この伝説の全体像と、日本の社会や教育場においてどのような教育的な価値や問題があったのかを解明することを目的とした。研究の時代的範囲は明治初期から昭和中期にかけてである。

本研究ではこの目的を達成するための方法として、二つの方法を組み合わせて研究に当たった。一つは、「メロス伝説」のネットワーク分析であり、もう一つは、そのテキスト分析である。

ネットワーク分析では、伝説の総体をネットワーク科学の視点からとらえ、ネットワークグラフ等を作成し、テキスト相互のつながりを可視化した。これによって複雑化した「メロス伝説」同士のつながりが明らかにされ、テキストの中には、多くのテキストと相互関係（リンク）を持ち、後続するテキストに影響を及ぼすハブの役割を持ったテキスト（以下、ハブテキストと呼ぶ）が存在することが判明した。そのハブテキストとは『泰西勸善訓蒙』の「朋友ノ交」、『フェイマスストーリーズ』の「ダモンとフィシアス」、『高等小学読本』の「真の知己」、『中学修身訓』の「約束せば必ず遂げよ」、「赤い鳥」の「デイモンとピチアス」、シラーの「人質」、そして太宰治の「走れメロス」であった。

テキスト分析では、これらのハブテキストに焦点を当て、それぞれのハブテキストが歴史・社会・教育的状況との関係から読書材としてどのような価値があったのかを解明した。

論文の構成は4部構成とした。第1部から第3部にかけては、おおよそ「メロス伝説」のネットワークにおける時代ごとの展開状況によってわけ、その時代のネットワークの特徴を示すタイトル（題名）を付した。

第1部は「「メロス伝説」の流入と生成する「メロス伝説」のネットワークの萌芽—明治初・中期」と題して、明治初・中期に日本に流入し、ネットワークの前触れや基礎となった2つのハブテキスト（『泰西勸善訓蒙』の「朋友ノ交」、「フェイマスストーリーズ」の「ダモンとフィシアス」）を対象に考察を行った。

第2部は、「国民の中に張り巡らされる「メロス伝説」のネットワーク—明治後期・大正期」と題して、流入してきた伝説を各領域や場において広げ、国民国家の中

に浸透させた3つのハブテキスト（『中学修身訓』の「約束せば必ず遂げよ」、『高等小学読本』の「真の知己」、『赤い鳥』の「デイモンとピシ阿斯」）を中心に考察をおこなった。

第3部では、「ネットワーク上に構築された新たなハブテキスト「走れメロス」—昭和初・中期」と題して、ネットワーク史上最大のハブとなった「走れメロス」を対象に考察を行った。第1章で「メロス伝説」の中で「走れメロス」にどのような特徴があったのかを明らかにした上で、第2章でそれがどのように教育場で受け入れられたのかを考察した。

第4部は「メロス伝説」のネットワークの総体とそこから見る読書材としての価値」と題して、「メロス伝説」のネットワークの総体とそのダイナミズムを明らかにしたうえで、本研究の総合的な考察を行った。

第1章では「メロス伝説」を俯瞰的、立体的に把握できるようにデータ化・グラフ化して分析し、第2章では、第1章のデータをふまえたうえで、各部各章で考察した読書材としての価値の諸相から、「メロス伝説」の総体に見る価値を明らかにし、その問題と可能性に言及した。

各部章で明らかにした成果は終章でまとめてあるが、その内容を以下に要約して示す。

第1部第1章では『泰西勸善訓蒙』の「朋友ノ交」を「メロス伝説」の出発点と位置づけ、読書材としての価値と、「メロス伝説」における問題の所在を確認した。「メロス伝説」（「朋友ノ交」）は、献身的・自己犠牲的な行為による信愛と助け合いの規範として挙げられていたが、『泰西勸善訓蒙』は「西洋のモラル」を知るという言語文化財としての価値もあり、「メロス伝説」も、近代西洋社会における対人関係のモラルを知ることにも役立てられていた。その後の伝播の過程では、近代社会的な対人関係とは切り離され、儒教道德のもとで「朋友」「信義」「信実」を説明するために用いられたことを指摘し、この伝説が、修身・道德の教材として出発し、以後の「メロス伝説」の歴史において国体イデオロギーと関係を切り結ぶことを示唆した。

第1部第2章では「メロス伝説」のネットワーク形成の要となった「フェイマスストーリーズ」（「ダモンとフィシ阿斯」）を検討した。

「フェイマスストーリーズ」は入門期の英学生に向けて翻刻された英語副読本として日本に流入した。ストーリー性豊かで平易な文体で書かれていることを特徴とし、その内容は英学のための予備知識を供給するものであり、読者の可読性を高める点に読書材としての価値があった。

一方で、女子高等教育機関においては西洋の精神を身につけるためのファーストステップ的な位置づけでも使用されていた。西洋の精神の摂取という点では『泰西勸善訓蒙』と通底した言語文化財としての価値も認められおり、近代国家をつくる過程で

流入したテキストとして位置づけた。「ダモンとフィシアス」は英語副読本としてだけでなく、日本語に翻訳され、子ども読み物としても受容されたが、そこではこのテキストに内包するストーリー性と品性修養に資する徳性が加味されて評価されていたことを指摘した。

第2部第1章では『中学修身訓』の「約束せば必ず遂げよ」を検討した。『中学修身訓』は、中学生を対象に実践的な道徳を身につける必要から、坪内雄蔵が独自に編纂した修身教科書であった。その中で「メロス伝説」は約束を守る習慣をつける規範感化材としての価値が見いだされていた。その後「約束せば必ず遂げよ」はコア・ハブテキストとして、青年・一般の修養を担い、軍隊や警察という実力組織にまで浸潤し、国民国家の中核へと影響力を及ぼしたことを指摘した。

第2部第2章では、『高等小学読本』の「真の知己」を検討した。「真の知己」は、信義と愛情というテーマを内包し、「教育勅語」の「朋友ノ信」を国民の内面に注入する役割が与えられていた。それと同時に西洋由来の話として、西洋の言語文化を理解する話としての価値も認められていた。それは西洋の文化を鏡として自文化を理解し、一層の国民性を養おうとするねらいからであった。以後「真の知己」は、そのテキストに内包されたストーリー性や徳性の高さが認められ、修身の場や演劇の舞台でも使用されるようになった。多領域での読書活動に加えて子どもたちの身体をもまきこむかたちで国民道徳を補完する役割を果たしたことを指摘した。

第2部第3章では、「赤い鳥」の「デイモンとピシアス」を検討した。「デイモンとピシアス」は、人物やその言動が豊かに描かれており、子どもたちが物語世界に入り込んで楽しめるような童話に仕上げられていた。しかし一方で、「デイモンとピシアス」には「信実」と「友愛」というテーマが含まれており、子どもたちに自己犠牲の精神を身につけさせることが期待されていたことを指摘した。

第3部第1章では、スーパーハブとなる太宰治の「走れメロス」と他のハブテキスト群を比較分析し、「走れメロス」の特徴を、場面が追加され、人物を中心とした複雑な心理が描かれていることや、それらによって「信実の一貫困難性」が示されていることとし、これまでの「メロス伝説」の利用価値を相対化するものと指摘した。

第3部第2章では、「走れメロス」が教材化の時点でどのような価値が認められたのかを検討した。教材「走れメロス」は経験主義単元学習と文学教育とが交差する転形期に生成したテキストであり、「読むこと」の技術を高める「読む材料」としての扱いを受けると同時に、情操教育としての期待もかけられていたのであった。人物の心理等が描かれていることが評価されていたが、信実の一貫困難性は等閑に付され、メロスはその勇者ぶりが強調されて解釈されていたことを指摘した。

第4部第1章では、1871（明治4）年から1960（昭和35）年までにかけての「メロス伝説」を発掘・収集し、収集したテキストの引用関係を調べ、それをもとにして「メロス伝説」のネットワークをグラフ化し、その総体を可視化した。その結果、以

下のことが明らかになった。

一つ目は、「メロス伝説」のネットワークは、スケールフリー性を有しており、多くの派生テキストを生み出すハブテキストが存在していたことである。二つ目は、これらのハブテキストがネットワーク上で「世代交代」を行っており、威力を発揮するテキストの入れ替えが行われていたこと。三つ目は、1900年代～1930年代のハブテキストによって「メロス伝説」のネットワークが形成され、国民全体に浸透したこと。四つ目は、「メロス伝説」をハブテキストの系統別に時期区分ができること。五つ目は、ハブテキストは一つの場合に閉じていたわけではなく、領域を越境しつつリンクを広げていたことである。

以上のように、「メロス伝説」の総体を可視化したことで、「メロス伝説」が言語文化の領域を相互に移動し、テキストの世代交代を行いながらネットワークをかたちづくり、受容の裾野を広げてきたことを明らかにできた。

第4部第2章では、メロス伝説には大きく二つの利用価値がみとめられていたことを指摘した。一つには、道徳的な規範を示す規範感化材として価値づけられていたこと。二つには、この話が西洋に由来しており、西洋の文化を知るための言語文化財としての価値が認められたことである。

「メロス伝説」の価値は、大きな流れとして、ネットワークが日本の教育場に伝播・拡大するに従って合理化されていたことも指摘した。西洋の文化・精神といった言語文化財としての価値は背景となり、人間形成に役立てられる規範感化材としての価値が前景化して、終局的には、学校教育の内においては「教育勅語」の「朋友相信」に、学校教育の外においては、「修養」の文脈に回収され、学校の内外を行き来しながら国民道徳に奉仕し国家を支える例話として機能していたのである。

問題点としては、「メロス伝説」が戦時下における自己を犠牲にする精神的な下地を作る一翼を担ったこと、また戦後においても戦前・戦中から引き継がれた自己犠牲の精神が、教育内容を拘束し、また同時に教育が自己犠牲の精神を再生産していることを指摘した。

なお、問題を解決する糸口の一つとして「メロス伝説」のネットワークそれ自体を言語文化財として活用することを提案し、これによって日本の外へと視野を広げながら、日本の内なる言語文化を内省し、日本人としての言語行動のパターンを見つめ直すことができる可能性も示した。